

# 宝治元年『院御歌合』内部考証

―構成、勅撰集入集状況、出詠歌、判詞を手がかりに―

藤川 功和

はじめに

『院御歌合』（『仙洞十首歌合』、『百三十番歌合』とも。本稿では「新編国歌大観」の呼称による）は、宝治元年（一二四七）成立の、十題、百三十番、出詠歌人二十六人による、後嵯峨院政初発期に催された大規模な歌合である。出詠者は、主催者後嵯峨院をはじめ、藤原為家・為氏父子ら御子左派歌人と蓮性ら反御子左派歌人、また、西園寺実氏ら権門歌人や葉室定嗣ら院近臣などで構成されている。位藤邦生を中心とするメンバー<sup>(1)</sup>で進めてきた宝治元年『院御歌合』の注釈を最終題まで終えた。解釈に疑問が残る箇所もあり、また、最初の「早春霞」題から三題目の「五月郭公」までは群書類従本を底本とし、それ以降は永青文庫本を底本とするなど、本文の不統一もあり、今後は全体を再検討して、さらに正確な注釈を目指してゆきたい。

本稿では、そういった再検証の前段階として、『院御歌合』全体の構成や、当該歌合の四年後に為家によって撰集された後嵯峨院下命

による最初の勅撰集『続後撰和歌集』への入集状況等を再確認し、本歌合に関して、若干の私見を提示したい。

## 一 『続後撰和歌集』と『院御歌合』

『院御歌合』の設題は、四季・恋・羈旅・賀で構成されている。

「早春霞」(春) 「山花」(春) 「五月郭公」(夏)

「初秋風」(秋) 「海辺月」(秋) 「野外雪」(冬)

「忍久恋」(恋) 「逢不遇恋」(恋) 「旅宿風」(羈旅)

「社頭祝」(神祇)

例えば、「新編国歌大観」第五巻歌合編をみると、

○寛和二年(九八六)六月十日『内裏歌合』(題) (春) 霞・鶯・梅

・子日・桜・款冬、(夏) 郭公・瞿麦・菖蒲・螢、(秋) 織女・霧・

月・松虫・網代、(冬) 紅葉・時雨・霜・雪、(賀) 祝、(恋) 恋、

○天喜元年(一〇五三)八月『越中守頼家歌合』(題) (春) 立島・

鹿波川、(夏) 無景水・櫛田杜、(秋) 三島・木葉郷、(冬) 渋谷浦・

石西渡、(恋) 名子統橋、(賀) 二神山

○承暦二年(一〇七八)『内裏歌合』(題) (春) 子日・霞・鶯・桜、

(夏) 藤花・菖蒲・郭公・五月雨、(秋) 七夕・月・鹿・紅葉、(冬)

雪、(賀) 祝、(恋) 恋

○永長元年(一〇九六)『権大納言家歌合』(題) (春) 霞・鶯・桜、

(夏) 郭公・五月雨、(秋) 月・女郎花・紅葉、(冬) 雪・千鳥、(賀)

祝、(恋) 恋

○治承三年（一一七九）十月十八日『右大臣家歌合』（題）（春）霞・花、（夏）子規、（秋）月・紅葉、（冬）雪、（賀）祝、（恋）恋、（羈旅）旅、（雜）述懷 等が、当該歌合とほぼ同様の題の構成の先行例としてみえる。また、後嵯峨院時代までを含めた歴代勅撰集の部立てをみると、『千載和歌集』（四季・別・羈旅・哀傷・賀・恋・雜・積教・神祇）や、『続後撰和歌集』（四季・神祇・積教・恋・雜・羈旅・賀）に、構成や配列上の似通いが看取される。

一方、後嵯峨院政期の他の歌合に目を転じると、建長三年（一一五一）九月十三夜催行の『影供歌合』では、「初秋露」「山家秋風」「朝草花」「暮山鹿」「霧間雁」「名所月」「田家月」「行路紅葉」「寄煙忍恋」「寄月恨恋」の十題となっており、催行時期である秋に事寄せた設題となっている。

また、文永二年（一一六五）七月催行の『歌合』では、「山花」「里郭公」「河月」「野雪」「忍久恋」の五題で、四季と恋とで設題されている。次の文永二年八月十五夜『歌合』では、「未出月」「初昇月」「停午月」「漸傾月」「欲入月」の月五題となっている。

さらに、文永二年九月『龜山殿五首歌合』では、「河月」「野鹿」「山紅葉」「不逢恋」「絶恋」の秋に事寄せた五題の設題となっている。

つまり、文永二年七月の『歌合』が四季と恋を設定している以外は、いずれも催行時点の季節に関わる題を中心に構成されている。ところで、当該歌合から『続後撰和歌集』へ入集した歌人を一覧すると以下のようになる。

『院御歌合』から『続後撰和歌集』へ入集した歌人と入集状況

①後嵯峨院（28歳）―十四番左「山花」↓『続後撰』春歌中・78、二十七番左「五月郭公」↓『続後撰』夏歌・200、五十三番左「海辺月」↓『続後撰』秋歌中・348、百十八番左「社頭祝」↓『続後撰』神祇歌・534 ※（ ）の年齢は宝治元年時点。以下同じ。

②承明門院小宰相（未詳）―七十九番右↓『続後撰』恋歌一・676

③通忠（32歳）―五十五番左「海辺月」↓『続後撰』秋歌中・356

④公相（25歳）―百八番右「旅宿嵐」↓『続後撰』羈旅歌・1302

⑤公基（28歳）―三十一番左「五月郭公」↓『続後撰』夏歌・201

⑥為教（21歳）―五十七番右「海辺月」↓『続後撰』秋歌中・349

⑦為経（38歳）―九十七番左「逢不遇恋」↓『続後撰』恋四・871

⑧少将内侍（未詳）―八十九番右「忍久恋」↓『続後撰』恋歌一・677

⑨禅信（未詳）―六十四番右「海辺月」↓『続後撰』秋歌中・350

『続後撰和歌集』入集歌三首中、一首が『院御歌合』出詠歌

当然のことながら、後嵯峨院の入集数が一番多く四首、他の歌人は一首のみ『院御歌合』からとられている。また、これらの歌人の内、撰集下命者である後嵯峨院を除けば、各歌人の『続後撰和歌集』への総入集歌数は多くて公相の六首と十首以下であり、且つ、承明門院小宰相を除いて後嵯峨院を含めた八人はいずれも『続後撰和歌集』入集によつて勅撰歌人となつている。佐藤恒雄氏は、『院御歌合』や『宝治百首』の構成メンバーに関連して、「おそらくは為家が人撰に關与していると見られるD歌合〔院御歌合〕、稿者注」とF百首〔宝治百首〕・稿者注の場合には「努めて広く歌人を集めようとしたあとがありありと窺え」「それは来るべき勅撰集を目ざしての措置であつたに相違ない」と指摘されるが、後嵯峨院をはじめ八人の『続後撰和歌集』への入集状況から、『院御歌合』が広く当代歌人の詠を収集する撰集資料であつたことがあらためて確認される。

ところで、『院御歌合』から一番多く『続後撰和歌集』に入集している後嵯峨院については、讓位以前の詠作が殆ど確認されておらず、讓位後になつて本格的な作歌活動がなされたものと考えられている。小林強氏によると、後嵯峨院の讓位以前の詠は、嘉禎三年（一二三七）以前に一首、寛元元年に一首、寛元二年に一首、そして在位中の探題和歌の二首のみである。この内、『続後撰和歌集』においては、在位中の探題和歌の一首「しきしまのやまとしまねの朝霞もろこしまでも春はたつらし」（春歌上・くららぬにおましましける時、うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりけるついでに、霞を」・一

○）が、後嵯峨院の早い時期の詠である。また、小林氏によると、後嵯峨院の讓位後から『院御歌合』に至るまでの詠で実作が確認できるのは、宝治元年に四首のみである。

後嵯峨院の讓位以前の実作の現存状況や、当該歌合からの『続後撰和歌集』への入集状況を勘案すると、当該歌合は、『続後撰和歌集』の撰集資料、とりわけ、後嵯峨院詠の撰集資料という側面があるのではないだろうか。『院御歌合』から後嵯峨院の詠を詠歌内容に偏り無く収集しようとするのであれば、特定の季節や状況（恋・賀）に特化した設題ではなく、まんべんなく題を設定している方が、当該歌合催行時点で実作が充実しているとは言い難い。後嵯峨院の詠を収集する材料としては使い勝手がよいはずで、実際、当該歌合からの後嵯峨院の『続後撰和歌集』への入集歌は、「見ても猶おくぞゆかしきあしがきのよしのの山の花のさかりは」（春歌中・七八・十首歌合に、山花）、「さとなれていまぞなくなるほととぎすさ月を人はまつべかりけり」（夏歌・二〇〇・十首歌合に、五月郭公といへる心をよませ給うける）、「しほがまのうらのけふりはたえにけり月見むとてのあまのしわざに」（秋歌中・三四八・十首歌合に、海辺月といへる心をよませ給うける）、「わがすゑのたえずすまなんいすずがはそこにふかめてきよき心を」（神祇歌・五三四・十首歌合に、社頭祝）と、春、夏、秋、神祇に一首ずつ入集しているのである。後嵯峨院は、『続後撰和歌集』に『院御歌合』出詠歌以外に十九首入集しているが、その内、当該歌合と近接して催された『宝治百首』か

らは四首と『院御歌合』からの詠と同数が入集しており、逆にいえば『院御歌合』が『宝治百首』と同等に撰集資料として扱われていたことが窺えよう。<sup>(5)</sup>

## 二 〈場〉としての『院御歌合』

一方、『院御歌合』から『続後撰和歌集』に歌を採られていない歌人十七名の、当該歌合における勝敗と『続後撰和歌集』までの勅撰集入集状況は以下の如くである。

- ①実氏（54歳）―勝3負4持3（対 俊成卿女）  
『新勅撰和歌集』十七首入集、『続後撰和歌集』―三十六首入集
- ②俊成卿女（未詳）―勝4負3持3（対 実氏）  
『新古今和歌集』二十八首入集、『新勅撰和歌集』八首入集、  
『続後撰和歌集』十一首入集
- ③実雄（32歳）―勝6負2持2（対 通忠）  
『続後撰和歌集』八首入集
- ④定雅（30歳）―勝1負7持2（対 公相）  
『続後撰和歌集』一首入集
- ⑤信実（71歳）―勝4負3持3（対 為経）  
『新勅撰和歌集』十首入集、『続後撰和歌集』十七首入集
- ⑥通成（26歳）―勝4負2持4（対 雅光）  
『続後撰和歌集』一首入集
- ⑦雅光（22歳）―勝2負4持4（対 通成）

入集ナシ

- ⑧有教（26歳）―勝1負6持3（対 弁内侍）  
『新勅撰和歌集』一首入集、『続後撰和歌集』二首入集
- ⑨弁内侍（未詳）―勝6負1持3（対 有教）  
『続後撰和歌集』四首入集
- ⑩師継（26歳）―勝3負2持5（対 雅忠）  
『続後撰和歌集』二首入集
- ⑪雅忠（20歳）―勝2負3持5（対 師継）  
『続後撰和歌集』一首入集
- ⑫蓮性（66歳）―勝6負4（対 下野）  
『新古今和歌集』一首入集、『新勅撰和歌集』十二首入集、  
『続後撰和歌集』十九首入集
- ⑬下野（未詳）―勝4負6（対 蓮性）  
『新古今和歌集』二首入集、『新勅撰和歌集』二首入集、  
『続後撰和歌集』六首入集
- ⑭為氏（26歳）―勝5負3持2（対 少将内侍）  
『続後撰和歌集』六首入集
- ⑮経朝（33歳）―勝3負5持2（対 禅信）  
『続後撰和歌集』一首入集
- ⑯嘉陽門院越前（未詳）―勝9持1（対 為家）  
『新古今和歌集』七首入集、『新勅撰和歌集』三首入集、  
『続後撰和歌集』三首入集

⑩為家(50歳)―負9持1(対 越前)

『新勅撰和歌集』六首入集、『続後撰和歌集』十一首入集

これら十七名の内、実雄、定雅、通成、弁内侍、師継、雅忠、為氏、経朝の八名は、『続後撰和歌集』入集によって勅撰歌人となっている。なお、八名の『続後撰和歌集』入集歌は以下の如くである。

○実雄(176『宝治百首』、278「入道前撰政家に秋の三十首歌よみ侍りけるに、よみてつかはしける」、354『影供歌合』、421『影供歌合』、451『宝治百首』、490『宝治百首』、566『宝治百首』、753『宝治百首』)

○定雅(670『影供歌合』)

○通成(345『影供歌合』、783「寄松恋」、1362「月多秋友といふ題を講ぜられ侍りしとき」)

○弁内侍(178「卯月のついたちごろ、内より女房ともなひて郭公ききにとて西園寺にまかれりけるに、はつこゑききてよみ侍りける」、247『影供歌合』、391『宝治百首』、671『影供歌合』)

○師継(755『宝治百首』、976『影供歌合』)

○雅忠(63「春歌の中に」)

○為氏(41「建長二年詩歌をあはせられ侍りし時、江上春望」、70「花の歌の中に」、360『影供歌合』、673「忍恋を」、802「題しらず」、830「おなじ心を」)

○経朝(491「(冬月)」)

八名の内、定雅、雅忠、経朝は、当該歌合において負け越してお

り、なおかつ勝数が二と少なく、『院御歌合』から『続後撰和歌集』に歌がとられなかったのは、当該歌合からの『続後撰和歌集』入集歌が原則として負歌からは採られていないことと関係している。また、勝ち越している実雄、通成、師継、為氏についても、当該歌合以前の歌歴はそれほど充実してはおらず、一方で、実雄、通成、師継、為氏は、佐藤恒雄氏が指摘される如く「君側の高級廷臣たちによる内々の会として出発した」後嵯峨院歌壇において「御幸に供奉した公卿廷臣たち」であった。おそらく八名の『院御歌合』出詠歌には、『続後撰和歌集』撰者為家の目に叶うものがなく、『続後撰和歌集』成立以前に後嵯峨院歌壇で催された他の歌合や百首歌(主に『宝治百首』や建長三年『影供歌合』等から歌をとられたもの)の思しい。

一方、『院御歌合』から『続後撰和歌集』へとられなかった十七名の内、『続後撰和歌集』以前の勅撰集に入集している歌人は、実氏、俊成卿女、信実、有教、蓮性、下野、嘉陽門院越前、為家の八名である。八名の『院御歌合』における勝敗をみると、勝ち越しているのは、俊成卿女、信実、蓮性、下野、越前の五名。この内、越前の勝数九は、『院御歌合』全体において後嵯峨院に並んで最多であるにも関わらず一首も『続後撰和歌集』にとられなかったことになる。例えば、次に勝数の多いのは公相の七だが、彼の詠は勝歌の中から『続後撰和歌集』に入集しているし、また、勝数が僅か二の通忠もその内の一首が『続後撰和歌集』に入集していることなどを考える

と、当該歌合における勝数と勅撰集(二二)では特に『続後撰和歌集』への入集の有無とが必ずしも比例しない場合が存する。

例えば、越前は、『院御歌合』「早春霞」題において、「明わたるみねのかすみを出る日の影もくもらぬ千世の初春」(二二五)と、為家が「祝言もことによるしく侍れ」と評する後嵯峨院政への祝言詠を提出しているが、為家はその歌を『続後撰和歌集』にはとっておらず、『続後撰和歌集』には同じく「早春霞」題詠の「さほひめの衣はるかぜなほさえてかすみの袖にあはゆきぞふる」(『続後撰和歌集』「春歌上・早春霞といへる心を」・二二〇)を入集させているのである。<sup>7)</sup>

一方、越前と番えられて負九、持一の為家は、例えば、以下の如き詠を提出し、且つ自ら自作を判じている。

「山花」題「老の身にくるしき山の坂こえて何とよそなる花をみるらん」(二十六番右)について、為家は「左、やまの心おほつかなかや、右くるしき山の坂こえてといへる凡卑のすかた、たとへはつま木おへる山人の、なほしも花のかけをさりてよそに見たるおもかけ、はなはたみくるしく侍にこそ、尤為負」と指摘して自ら負を付している。位藤邦生氏は、この番を取り上げ、「判詞中の『古今和歌集』の仮名序(黒主)を踏まえた文章はともかく、歌の中に「老か身にくるしき」といった字句があつて、晴の歌合の歌にふさわしくないのは、為家自身がよくわかつていたはずで、「負ける」にふさわしい歌でもあつた」と指摘される。<sup>8)</sup>

また、為家は「五月郭公」題で「身をなげく涙は時も別ぬに五月

ときなく郭公哉」(三十九番右)と詠み、自ら「右、五月ときなく郭公、題の心下の句にとりあつめていふかひなく侍るうへに、身をなげくといへる、先うけられず侍れは、左勝とこそ申侍へらめ」と指摘し負けを付しているが、位藤氏はこの為家詠と自詠に対する判詞にも注目され、「歌の第一句が「身をなげく」となっており、これも晴の歌合にふさわしくないことは、はじめからわかっていたはずである。為家自身判詞に「身をなげくといへる、先うけられず」と述べている。また下句「五月ときなく郭公」に題の心がとり集められている欠点も、作歌の段階で為家が十分に承知していたことであろうから、これもやはり負けるために番えられた作品であつた」と述べられ、『院御歌合』における為家が意識的に負ける様な歌を提出した可能性を指摘されている。

この為家の例から、詠者によつては歌合の勝負には必ずしも拘泥せず、それとは別の意識のもとに歌作している可能性が想定されるのである。

例えば、嘉陽門院越前に次ぐ勝ち数六をあげながら、『続後撰和歌集』に一首も採られていない蓮性の場合どうであろうか。

(資料1)『院御歌合』山花・二十三番

廿三番

左

沙弥蓮性

尋きて今そしめゆふ玉たすき雲<sup>山イ</sup>ゐる嶺の初桜花

右勝

下野

みよしのゝおくまで花にさそはれぬかへらん道のしほりたにせて

左、いまそしめゆふたまたすきなといへる、ふるきことはを

かけていひしりて侍れと、右、山そあらはしたく侍れとも、

しほりといへるにきこえて侍れは、今たつねきたるよりはか

へらんみちのしほりたにせてといへるは、花にさそはるゝ心

猶ふかくやそめまして侍へき、仍以右為勝

(資料2)『院御歌合』五月郭公・三十六番

卅六番

左

沙弥蓮性

郭公いかてあやめに引そへてなかなくねをも玉にぬかまし

右勝

下野

五月雨のふりにし友とかたらへはなれもことゝふ時鳥哉

左、哥さまよろしく侍るを、下句をよみあげ侍らぬほどは、

いかに侍へきにかときこゆる所や侍らん、右、ふりにし友と

かたらへはなれもこととふなといへる、心かよへる所さるか

たも侍なんとて、さのみはいかゝと思ひながら、又勝の字を

つけ侍ぬ

これらは為家がいづれも負けを付した歌であり、傍線に注目するといずれも所謂『万葉集』を源泉とする表現の使用が確認される。<sup>(9)</sup>

一方、『続後撰和歌集』の蓮性入集歌を確認すると、「みくまのの

浦のはまゆふいくかへり春をかさねてかすみきぬらん」(春歌上・四

二・「洞院撰政家百首歌に、霞」)、「はるをへて花をし見ればとばか

りをうきなくさめの身ぞふりにける」(春歌中・九六・「花歌の中

に」)、「なにはなるみつともいはじあしのねのみじかき夜半のいざよ

ひの月」(夏歌・二二八・「題しらず」)、「わたのはらあさみつしほの

いやましにすずしくなりぬ秋のはつかぜ」(秋歌上・二四一・「寛喜

元年女御入内屏風に、海辺秋風」)、「ながむれば見しよの秋もわすら

れず月にむかしのかげやそふらん」(秋歌中・三七一・「月の歌中

に」)、「きりぎりすながきうらみをすがのねの思ひみだれてなかな

夜ぞなき」(三八四・「題しらず」)、「神な月しぐるるころといふ事は

まなくこのはのふればなりけり」(冬歌・四六二・「冬のはじめの歌

とて」)、「としくるるかがみのかげも白雪のつもれば人の身さへふ

りつつ」(五二六・「としのくれの心を」)、「しるやとてまくらだに

せぬよひよひの心のほかにもるなみだかな」(恋歌中・六五〇・「恋

歌中に」)、「恋ひしなむ身をやはをしむあふ事にかへぬいのちの猶

つらきかな」(恋歌二・七一八・「題しらず」)、「あだ人のこころの秋

のつゆよりぞ見しことの葉もいろかはりゆく」(恋歌四・九二三・「道

助法親王家の五十首歌に、寄露恋」)、「なげきわびぬぬよのそらのあ

けやらでうかりし鳥のねこそまたるれ」(恋歌五・九八〇・「入道前

撰政家歌合に、寄鳥恋」)、「のちに又あひ見む事もたのまれず身もお

いらくのほるのわかれば」(雑歌上・一〇四七・「暮春の心をよめ

る」)、「身はかくてうきぬのいけのあやめぐさひく人もなきねこそ

つきせね」(一〇五四・「夏歌の中に」)、「ふりはつるわが身むそぢ

のかみなづきそではいつよりしぐれそめけん」(一〇九〇・「題しら

ず(二)、「むかし思ふたかの山のふかき夜にあかつきとほくすめる月かげ」(雑歌中・一一一八・「古寺月といへる心を」)、「わかぬ浦のよものもくづをかきおきてあまのしわざのほどやしられん」(一一四六・「題しらず」)、「いかなりしみののをやまのいはね松ひとりつれなきとしのへぬらん」(一一七四・「身をうれへてよみ侍りける」)、「はかなさのいのちもしらぬ別ぢはまでどもえこそちぎらざりけれ」(羈旅歌・一二八四・「別の心を」)と、『万葉集』撰取は殆ど確認出来ない。見方を変えれば、『続後撰和歌集』撰者為家が『万葉集』の表現を撰取した蓮性詠を入集させなかつたとも捉えられるのである。『院御歌合』からの蓮性の入集が確認出来ない要因の一つは、当該歌合における蓮性の詠みぶりにあつたとも考えられる。さらに見方を変えれば、蓮性は『院御歌合』において、勝敗とは別に、自身の主張する歌風を対外的にアピールする狙いがあつたとも捉えうるのである。<sup>(11)</sup>

では、本節の最後に、御子左家の庇護者であり、なおかつ、前太政大臣、関東申次、院評定衆という、後嵯峨院政において極めて重要な位置を占めていた西園寺実氏の場合をみてみよう。実氏については、勝三、負四、持三と、成績自体あまりよくない。例えば、「早春霞」題で実氏は以下の如く詠む。

(資料3)『院御歌合』早春霞・二番

二番

左持

太政大臣

すへらきの御代さかゆへき春なれば霞をこめて立や出まし

右

俊成卿女

君かため猶よろつ代の春の色にかすみそめたる明ほのゝ空

左哥、御代さかゆへき春世みなこひねかふへきことに侍うへに、下句そのいはれきこえておかしく侍にや、右、君かため猶万代といへる、又すてかたく侍れば、両方の祝言なすらへて為持

上の句「皇の御代さかゆべき春なれば」(帝の、そして後嵯峨院の治世がこれからきつと栄花を誇るに違いない春なので)と、前年正月に譲位した後嵯峨院のこれからの治世を言祝ぎ、その繁栄が、下の句「霞をこめてたちや出でまし」に掛かる構成となっている。

ここでの「たち」(立ち)は、「春」の縁語であると同時に、「たち」「い」「づー(表舞台に出る)意も含んでおり、「やくまし」(くしようか)という主語の意志を示す表現と共に用いられている。また、「霞」は、「君が世の春のためしはすみよしの松にかかれる霞なりけり」(『拾玉集』五七三三)にみる如く、治世への祝意を表すのに用いられ、さらに、「春の色をいく万代かみなせ河霞のほらの苔のみどりに」(『建保名所百首』春二十首・水無瀬河・一九五・定家)の如く、仙洞を連想させる表現でもあつた。実氏は、後嵯峨院政を象徴する「霞」を「こめ」(散らすことなく集め)て、これからの院政に我こそが「たちや出でまし」(一役買おう)という意志を詠歌の中に込めていると解されるのである。<sup>(12)</sup>



(資料4)『院御歌合』山花・十五番

十五番

左 太政大臣

おもひ出よ我もむかしは龍田山高根の花も袖にかけてき

右勝

俊成卿女

春は又花の都となりにけり桜にほふみよしの山

左、我もむかしはたつた山、さためてゆへふかく侍らんと見え侍り、右、桜にほふみよしの山、花の都に心も成かへりてうつり侍ぬるにこそ

また、「山花」題で、実氏は「高根の花」を詠み込むが、この表現は、慈円が『白氏文集』の詩句を題にした句題和歌「文集百首」で「谷かげや心のほひ袖にみちたかねの花の色もよしなし」(拾玉集)詠百首和歌(文集百首)・閑居十首・「心足即為富、身閑仍当貴、富貴在此中、何必居高位」・一九八〇)と詠んでいるように、詩句の「高位」を換言した表現と考えられる。実氏の場合、「我もむかしは龍田山高根の花も袖にかけてき」(私も昔は立田山の高嶺に桜狩りした如く宮中において高位にあった)と、『院御歌合』の前年十二月に前太政大臣を辞した実氏自身を引き写したような詠みぶりをみせている。<sup>(13)</sup> 為家は、「さためてゆへふかく侍らんと見え侍り」と、実氏の意図を汲み取っているかのような判を記すが、結果的には俊成卿女に勝を付している。これら実氏の詠からは、出詠者が題を十全に詠み込むことよりも、自身の主張を和歌に織り込むことを優先させ

る事象が見て取れるのであり、それは逆に言えばそういった主張が許される(場)として『院御歌合』が機能していたという見方も成り立つのではないだろうか。

おわりに

以上、『院御歌合』の題の構成や『続後撰和歌集』入集歌人、非入集歌人の確認や、為家、蓮性、そして実氏の『院御歌合』出詠歌や判詞等の検討を通して、『院御歌合』の持つ性格の一端を指摘した。当該歌合が、後嵯峨院をはじめとする当代歌人の撰集資料となっていたことを再確認するとともに、讓位以前の詠が殆ど確認されない後嵯峨院から広く詠を集める狙いのもと設題がなされた可能性があることを指摘した。

一方、為家、蓮性、実氏の出詠歌を摘出し、歌合における勝負とは別に、各詠者が個別の意図のもと歌作に及んだ可能性をあらためて指摘した。

当該歌合に関しては、後嵯峨院政期に満ちていた祝言性を色濃く看取できることが従来指摘されているが、今まで行ってきた注釈作業の成果等を利用しつつ、各歌人の出詠歌や判詞をさらに細かく分析していくことによって、『院御歌合』の様々な性格が明らかになるものと思われる。今後も『院御歌合』を読み進めてゆきたい。

※『院御歌合』本文は、永青文庫本（細川家永青文庫叢刊 第八巻『歌合集』《昭和59年 汲古書院》）を用い、『万葉集』は、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集 訳文篇』を用いた。その他の和歌本文は、「新編国歌大観」に拠った。なお、引用本文には適宜傍線等を付した。

〔注〕

(1) 位藤邦生・森下要治・田野慎二・山崎真克・藤川「宝治元年『院御歌合』注釈―「社頭祝」題―」（『尾道大学芸術文化学部紀要』第9号 平成22年3月）。

(2) 後嵯峨院の『院御歌合』からの『統後撰和歌集』入集歌については、小林強氏「後嵯峨院の詠作活動に関する基礎的考察」（『中世文藝論稿』第16号 平成5年3月）に調査がみえる。

(3) 『藤原為家研究』（平成20年 笠間書院）序章第一節後嵯峨院の時代とその歌壇参照。

(4) 前掲(2) 論文参照。

(5) 有吉保氏は『宝治百首』に関連して、「この百首から統後撰集に採歌された歌は、春七、夏七、秋九、冬五、神祇二、恋二十四、雑二、賀一で計57首」で、「全体で400首中より57首の入集数は少ない感がある。また、撰者為家の入集が零であり、当代専門歌人の信実（寂西）、光俊（真観）、成茂などが各1首であり、宝治百首の作者四十名中十七名が1首も入集していないことは、

勅撰集撰進のための資料源としての百首歌の意味が果たされて  
いないことになる」と指摘される。『勅撰和歌集入門』（平成21  
年 勉誠出版）参照。

(6) 承明門院小宰相の当該歌合からの『統後撰和歌集』入集歌は  
持の歌、また、禪信の入集歌は負歌である。

(7) この他の越前の『統後撰和歌集』入集歌は、他に「たなばた  
のなみだやそへてかへすらんわが衣手のけさはつゆけき」（『統  
後撰和歌集』秋歌上・「おなじくよみ侍りける」・二六二）、「月  
かげはこほりと見えてよしのがはいはこすなみに秋かせぞふく」  
（『統後撰和歌集』秋歌中・「建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合  
に、河月似氷といへることを」・三四二）の二首。

(8) 「和歌の読解と作歌環境―『院御歌合』を例にして―」（『国語  
と教育』第32号 平成19年11月）参照。

(9) 蓮性の「山花」題詠の参考歌としては、「思ひ余り いたもす  
べなみ 玉だすき 畝傍の山に 我標結ひつ」（『万葉集』巻第  
七・「山に寄する」・一三三五）が、また、「五月郭公」題詠の参  
考歌としては、「ほととぎす いたくな鳴きそ 汝が声を 五月  
の玉に あへ貫くまでに」（『万葉集』巻第八・夏の雑歌・藤原  
夫人の歌一首）、「一四六五・藤原夫人」、「ほととぎす 待てど来  
鳴かず あやめ草 玉に貫く日を いまだ遠みか」（『万葉集』  
同・「大伴家持の霍公鳥の歌一首」・一四九〇・家持）等があげ  
られる。藤川『春日若宮社歌合』の諸相」（『国文学放』第204号

平成21年12月) 参照。

(10) なお、蓮性の『統後撰和歌集』入集歌の内、二四一番歌については、木船重昭氏が「葦辺より 満ち来る潮の いや増しに思へか君が 忘れかねつる」(『万葉集』第四・相聞・「山口女王、大伴宿禰家持に贈る歌五首」・六二〇※『新古今和歌集』恋歌五「中納言家持につかはしける」・山口女王) をあげられている。

『統後撰和歌集全注釈』(平成元年 大学堂書店) 参照。

(11) 岩崎禮太郎氏は、『内裏名所百首』、『洞院撰政家百首』、『宝治百首』における知家の「古典撰取」を調査され、「建保期と貞永期には三代集の撰取が多かったのに、宝治期になると急にそれが減じて、万葉歌の撰取が増している」と指摘された上で、「(知家は、稿者注) 寛元四年(一二四六) 頃から御子左派に反旗をひるがえした。その頃から知家は、万葉集を尊重する父祖の家学に目ざめ、万葉歌をふまえた歌が急激に増加するとともに、三代集からの撰取が急激に減少したのである」と指摘される。「知家の歌における古典撰取の様相と変遷―諸歌人との対比において―」(『日本文学研究』22号 昭和61年11月) 参照。

(12) 藤川「宝治元年『院御歌合』の西園寺実氏」(『国語と国文学』第83巻第6号 平成18年6月号) 参照。

(13) 藤川前掲(12) 論文参照。

〔付記〕本稿は、平成二十一年度尾道大学学長裁量教育研究費、研究テーマ「宝治元年『院御歌合』注釈を通じた鎌倉時代中期の〈政治と文学〉に関する総合的研究」(代表者 藤川功和) による研究成果の一部である。